

子どもの本だな 139

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

マーシャとくま ロシア民話

E・ラチヨラエ M・ブラトフ さいわ
うちだりさくやく (福音館書店)

森で迷子になったマーシャは、歩き回るうちに大きなくまの住む小屋に入り込んでしまいました。マーシャはくまのために、ペチカを焚いたり、おかゆを煮たり、食べさせたり。

ある日、マーシャはお菓子を入れたつづらを用意し、途中で開けたりせず村に届けてほしいと、くまに頼みました。そして、くまが外をのぞいている間に、自分もつづらにもぐりこみました。つづらを背負ったくまがひと休みし、お菓子を食べようとすると、マーシャの声がします。「みえるわみえるわ！きりかぶにこしかけちやいけないわ。…」くまは仕方なく歩き続け、マーシャの家の前につづらを置きました。

つづらにもぐりこんだマーシャがくまに見つかからないかハラハラします。重厚で温かみのある絵が、おはなしの緊張感を高めます。読んでもらえば4歳から楽しめます。(竹田)

図書館の本棚 466

編むことは力 ひび割れた世界のなかで、私たちの生をつなぎあわせる

ロレッタ・ナポリオーニ 著 佐久間 裕美子 訳 岩波書店 (5943)

昨年来、若者を中心に空前の編み物ブームだという。本書は、イタリア出身のエコノミストである著者が、長年のパートナーである夫に起因する金銭的な苦境に直面した際、編み物によって支えられたことをきっかけに記され、編むことの歴史的、社会的な力を紐解いている。著者は幼いころ祖母の監督のもと初めて編針を持った。緊張し、力まかせに糸を抑え込もうとする著者に、祖母は「リラックスして」と導いてくれた。この日から祖母と編み物をしながら、掛け算や詩、政治や経済を学び、人生の難しい局面を切り抜ける知恵を伝授されたと言語。

人類はどうやって編み物を始めたのか。著者はアンデス山脈の旅の途中、考古学専攻の学生から、デンマークの漁網をつくる方法が「編む」行為の始まりのひとつだと教わった。編み物は、食糧の確保と保温という両方の解決策として生まれたのだ。生きるための必需品として労働者階級で生まれた編み物は、その後、カトリック教会やヨーロッパの貴族の衣類として利益を生み出す産業へと変化していく。編み物の歴史において、多くの女性たちが家族のために編んできた。男性中心の社会にあつて抑圧されながらも、愛する人のために編むことによって、家族やコミュニティに生きた足跡を残した。それは、女性の真のパワーを示す一例であり、戦争や革命における市民の連帯にも繋がっていく。18世紀、大英帝国による植民地支配と搾取に苦しんだアメリカは、イギリスのウールをボーイコットし、自給自足に踏み切った。女性が政治に口出しすることは不適切だとされたこの時代に、彼女らは力を合わせて糸を紡ぎ、編み、独立に向けた戦争を闘った。そして、編み物は戦時下では暗号を編みこまれて諜報活動に関わり、難解な数学の方程式を視覚化するのに役立った。

今まで認識していなかった「編む」という行為の社会的な意味に気づかされるとともに、編み物の同じ動作の繰り返しがストレスホルモンを中和し、精神の安定に作用して、著者自身が再生への道を歩み始めていることに安堵する。何度かほどこいてはやり直す勇気があれば、何だって直すことができるという著者からのメッセージは温かい。(藤川)

#